

堕ちてゆく巫子

（無惨の淫獄）

※体験版※

※淫鬼喰らい巫子・竈門炭治郎のシリーズからです。

炭治郎は13の時に目の前で父を無惨に殺され、そのまま拉致、三か月間監禁されていましたが、実際に炭治郎が過ごした時間は二年に匹敵するものでした。

その間、炭治郎が無惨にどのような性的調育を受けていたのか、その一部を書き出したものです。

2時間後、炭治郎は無惨の仰臥した身体の上へ重なるように仰向けで乗せられ、胎を穿たれながら雛先を両手で嬲られ、延々と射精絶頂を繰り返していた。

「あううつ、はあ、ああああ・・・っ」

無惨の両手にはキバの生えた口が存在していて、中から巨大な舌が伸び、何もしなくても後ろを犯しているだけで射精している炭治郎の雛先を、これでもかと執拗に舐め回していた。

じゅぷじゅぷと秘孔を穿つ水音に、ぐちぐちと雛先を責める音が重複する。炭治郎の身体からは、淫鬼を誘う甘い花の匂いがしている。しかし当人は、あまりの極悦の連続に半分意識を失いかけ、性的な刺激に反応するだけで、裏返った艶声を上げるしかできていない。

無惨は手心を加えることなど一切せず、炭治郎の胎内を犯している無惨の剛直からもいくつもの舌が生えて、敏感な内壁を舐め回し、前立腺の裏を容赦なく舐め抉って、上下の運動の上に左右に激しく捏ね回したりする。

「はふっ、ああ、あああつ、あ、あ、あああ・・・」

射精の激悦も最初の頃から一切変わらず、おぞましいほどの極悦で炭治郎の思考能力を削ぎ続ける。

処女を散らして5時間で、人の一生涯の快楽を凝縮したような濃厚な凌辱を受け、炭治郎は自分の精液にまみれてドロドロという被虐の有様だった。

「炭治郎、気持ちいいか？」

ずっと犯し続けている無惨に疲労は全く感じられず、力強い勢いで胎内を穿ち続ける。腰を振りたくって洞内を削るように荒らし、じゅぷじゅぷと淫らな音が止まらない。

「んんっ、あ、あああ、あ、ああっあああ——！」

胎内へ数十度目の射精をされ、胎に溜まった無惨の精液が炭治郎の精液として吐き出される。まだ胎の中は無惨の精液でひたひたに溢れ、全てを出すにはもう5時間は必要な量だった。

「気持ちいいな？炭治郎。こういう時は気持ちいい、とはつきり言うんだ」

背後から炭治郎の耳を甘噛みしながら、無惨が呪詛のように炭治郎にしつこく語り掛ける。

「はああ！いい、いい、気持ち、いい、あ、あ、あああああっ！」

炭治郎の雛先から勢いよく白液が吐き出される。幼い身体が痙攣絶頂し、落下しそうな炭治郎の身体を下から抱きかかえて支え、無惨は腰を使い続ける。

「はあ、はあ、ああ、あ、ああ、あっ、ああ……」

気が遠くなる極悦が続きすぎて、下半身が自分の身体だと思えないほどに感覚が乖離してしまっている。しかし絶頂するたびに全身に甘い痺れが走って体中が蕩けそうになり、足のつま先から舌先、髪の手先までを甘美に包み、愉悦に酔わされる。

「炭治郎、いいな。お前は実に好い。まだまだ調育の余地があるな。これからが楽しみだよ」

「ひあっ！ふああっ！あっ！あっ！あっ！あああああああっ！」

無惨の腰遣いが一気に激しくなり、炭治郎の身体がめちやくちやに振り乱され、胎内を激しく攪拌されて絶頂から降りられない。

「あああっ！はあ、はっ……っ、あ、あっあああああ——！」

ぶちゅぶちゅと音を立てて胎内へ大量の精液が吐き出され、人間離れした長い射精に炭治郎の身体が絶頂痙攣を終えられない。

「うぐっ……！！う……あ……」

ようやく炭治郎の中から無惨の凶悪な剛直が引き抜かれ、胎内絶頂から解放される。

しかし引き抜かれても5時間に及んだ凌辱の感覚はなくならず、ずっと胎内を挿入されている感覚が続き、何もされていないのにまだ絶頂が止まらない。

「少し休ませてやろう。そのあとまた、可愛がってやる」

そう言って無惨は、ベッドの上で涙を流しながら、精液を吐き出し続ける炭治郎を見下ろし、その場から消えていった。

「はあ、ああっ……！これ、止めっ……！ああああ——！！」

炭治郎の射精絶頂が終わるのは、それから1時間後のことだった。

※中略※

しかしその声もすでに蕩け切り、抗う声にも力が全く入っていない。

炭治郎の下半身が快樂でもみくちやになっている時、上半身に注目していた淫鬼が、その桜色の突起に興味を示し始めた。

「ここはまだ手付かずか・・・でも感じるってことは素質があるな。俺たちの淫力で、イけるようにしてやるよ」

炭治郎は意味が分からず困惑したが、これから鬼にされることが自分を責めるさらなる手段になることを感じ取り、首を左右に振って拒絶の言葉を吐いた。

「い、嫌だ！これ以上なにもするな！おかしくなるっ！」

「いいじゃねえか、おかしくなっちなまえよ・・・どうせ無惨様のペットになるんだろう？だったら、気持ちいいところはたくさんある方がいいぜ？」

炭治郎の桜色を指で優しく捏ね回し、それだけでぞくんと愉悦が込み上げてくる。

鬼の指先から二本の細い管が伸びたかと思うと、両方の桜色を軽く突いた。これから何をされるのかを想像した炭治郎は、引き攣った声で拒絶の言葉を喚き散らす。

「嫌だーっ！嫌だ嫌だ！」

「うるせえ餓鬼だな。気持ちよくしてやるって言ってるのに、全く甲斐がないぜ・・・」  
すると先端から針を突き出した細い触手が、炭治郎の敏感な桜色に突き刺さった。

「っ・・・！！あつ、あつあ・・・！！」

痛みは一切ないが、胸を中心にして薬液が注がれる感覚が広がり、それはぶわあ・・・と胸全体に広がって、あまりの気持ちよさに炭治郎は頭を妄つとさせた。

「んんっ……ぐっ……」

顔を朱くして耐える炭治郎の様子を見て鬼が笑い、左右の桜色を同時にそれぞれの指で弄ぶ。片方は押し潰して離してを繰り返し、片方はクルクルと指を回して突起を責めていた。

「ふあああっ！」

炭治郎の上半身が反り返り、裏返った可愛らしい声が放たれる。鬼に打たれた薬液のせいで敏感になってしまったのは明らかで、これまでとは比べ物にならない感覚に、炭治郎が熱い息を吐く。

ぎゅっと抓まれただけで痛みギリギリの激感が走る。相当敏感になってしまったそこは、もう炭治郎の意思でどうにかなる身体ではなくなっていた。

「おらおら、こうすると気持ちいいだろ？」

揃えた四本の指で片方の桜色を上下に素早く摩擦され、涎が出そうな愉悦に、炭治郎は身を仰け反らせながら激しい反応を示した。

「はああっ！や、やめ……」

もう片方の桜色にも同じ愛撫をされ、逃げ場のない上半身の快楽に炭治郎は肌を痙攣させる。

「ああああっ！ふあ、や、やめろ！おかしい、変だ、ああああっ！」

「なんだイクか？イキそうか？」

「こつちも忘れるなよ、ほらほら……」

ザラついた舌を持った鬼が雛先を一層激しく舐めしやぶり、粒の連なった舌の鬼も激しい抽搐を繰り返している。

「あああつ！あつあああつあつ！あああ！」

下半身の絶頂感が一気にせり上がり、上半身の激感も無視できず、炭治郎は困惑していた。体中のどこにも快楽の逃げ場がなく、どこも身体の芯が熱くなる快感がせり上がってくる。

「まずはこつちをイカせてやるよ！おら、おらっ！」

秘孔を責める舌の動きが一層激しくなり、炭治郎の弱い部分を抉るようにして激しく責め立て、絶頂を一気に煽る。それと同時に雛先の舌も動きが巧みになり、汚れない色をした器官をこれでもかと責め立てる。

「ふああああつ！やめ、いやだ、やめろおおつ！ああ、あああああつ！」

雛先が先に絶頂を迎えて白液を吐き出し、次いで胎内から燃えるような熱い絶頂感がせり上がってくる。

「あああああつ……！」

無理矢理開かされた炭治郎の両足が小刻みに痙攣し、前と後ろで迎える挟み撃ちの極悦に炭治郎の喉から艶めいた声が放たれた。

「だんだん興が乗ってきたか？いい声を上げるようになったじゃねえか」

「こつちも直にイキそうだ。くく、お前の身体、どんどん快楽に弱くなっていくな」

胸をずっと愛撫し続ける鬼に笑いかけられるが、炭治郎は下半身で迎えた絶頂の余韻と、胸でずっと感じる強烈な感覚に耐えなければならぬ。反抗する声も出ず、奥歯を噛み締めて必死に、迫ってくる何かを堪える。

(む、胸が熱い、んんんっ！なんだか、どんどん高まってきて……)



ぞぞぞ、と背筋を愉悦が走った瞬間、鬼たちが擦る手をさらに速め、桜色を責め始めた瞬間、炭治郎は胸が突然熱くなり、ぶわりと温かいものが広がって意識が薄れていくのを感じた。

「あああああ——！ああ——！ああ——！ああつあああああ！」

ほぼ同時に両胸で迎えた絶頂感に、炭治郎は身体を大きく仰け反らせて汗を飛ばし、派手に快樂を訴えて狂乱する。

「よしよし！ようやく胸でイッたぞ！」

「さすが巫子様は素質があるなあ！」

「ほらほら、気持ちいいだろう？」

炭治郎の桜色を軽く引っ張っては離す行為を繰り返して、その幼い身体をヒクヒクと痙攣させる。

（なんだこれ・・・波が・・・なかなか引いて行かない・・・）

これが鬼たちの言う胸の絶頂なのかどうかは定かではないが、始まりがあつて終わりがあるのが絶頂と言ふのならば、この感覚はそうなのだろう。しかし、雛先の快感と違って、絶頂してもすぐに身体が快樂から解放されない。まるで胎で極めたときのように、敏感で、ずっとゆるゆると快樂が留まっている。

「んっ・・・ああ、はあ、やめ・・・」

自分の口から出るのは、鼻にかかった女のような声だった。それに激しい羞恥を感じるが、今の炭治郎には精一杯の拒絶だった。

「チンポもケツも十分ほぐれて楽しんだら？そろそろこっちも愉しませてもらうぜ」

絶頂に次ぐ絶頂で意識が明瞭としない炭治郎の周囲を、十人の淫鬼が取り囲み、一気にその体に掴みかかった。

「うわっ！やめ、いやだ、何をするんだ！」

抵抗する炭治郎に構わず、鉄のような剛力で身体をねじ伏せ、鬼の一人が叫ぶ。

「俺たち十人を愉しませてくれるんだろう？無惨様が提供して下さったオモチャだ、生半可なものじゃないだろうぜ！」

「お前の身体からずっといいい匂いがしてんだよ！ひひ、俺たちを誘うようないい匂いだ！」

「そんな・・・うぶっ・・・！」

言いかけた炭治郎の口に鬼が猛った剛直をいきなり突き込んだ。無惨との長時間のセックスで何度も強いられた口淫が蘇り、炭治郎は嫌悪を覚えたが、それだけではない感情まで、無惨に教え込まれてしまっていた。

「おら、しっかりチンポしゃぶってくれよ！はは、熱い熱い・・・気持ちいいぜ！」

「んむ・・・んっ・・・ぐうう・・・っ」

「まだそんな目ができるのかよ。いいぜいいぜ。その顔がトロけてチンポ欲しがるようにするのが楽しみだ！」

十人の鬼の手が一斉に炭治郎の瑞々しい肌に伸びてくる。

肩や腹、脇腹に手を這わせ、大腿をなぞり上げて、胸を掴み、雑先をめちゃくちゃに擦り回して、炭治郎の肌を無遠慮に触り始める。

「んんっ！んんっ！んんんんっ！」

無惨のせいで身体感覚を狂わされて、触れられる全てを快感として捉えてしまう。

(身体中ぞくぞくするっ……いやだ、これ……！)

口淫を強要される炭治郎の口から剛直が抜け、逆の方向を向かされたかと思うと、また違う剛直を啜えさせられ、炭治郎の顔の周りに鬼たちの肉棒がいくつも突き出されている。

「もうここも舌でたっぷり楽しんだら？俺のはすごくいいぜ？思いつ切り善がれ！」

「んぐううっうう——！」

秘孔に熱くて太い肉棒を突き挿れられ、炭治郎の胎内が一気に熱を帯びる。無惨以外のものを受け入れるのは初めてだったが、快感が嫌悪を塗り潰して炭治郎に愉悦の叫びを上げさせる。

挿入していきなり激しい挿挿をされ、炭治郎の身体も激しく揺さぶられる。

「んぐっ！んんっ！んんんんっ！んぶっ、ふあ、あぶっ、んぐぐ……っ！」

下半身で弾ける快感が炭治郎の心を内からも攻撃してくる。

いくつかの肉棒を代わる代わる口に突き込まれ、両手にも握らされて摩擦させられ、括った髪にも潜り込まれる。

めちやくちやに扱き立てられる雛先ではすぐに射精絶頂が来て、炭治郎は下半身を痙攣させたが、それでも鬼たちは廻り続ける。

「んん、んん——！」

※中略※

「はあ、はあ、ああ……っ……んん、はああ……」

すっかり甘い声に切り替わり、愉悦に耽溺するようになってしまった炭治郎を見下ろし、無惨は小さく笑った。

「炭治郎、気持ちよさそうだな。いい声で鳴いているじゃないか。私は嬉しいよ」  
激悦で瞳に力のなくなった炭治郎を見下ろし、無残が言う。

炭治郎の身体は股座を中心に白液にまみれ、今も激しく抽挿されている大蛇の刺激に身体をくねらせて甘い声を上げている。

「あっ……ああ、あっああっ……ああ、はああ……」

「好いか？炭治郎」

「ああ……い、好い……たまらな……ああ……っ」

蕩け切った声で炭治郎が呟くが、その響きには理性は感じられなかった。

甘い声であっ、あっ、と喘ぎ、身体を身悶えさせ、蛇によって快楽に耽溺させる美少年、という画は、なんと倒錯的でその嗜好があるものならば見ただけで小便を漏らしそうなほど官能的だった。

「炭治郎、どこが気持ちいい？」

無惨が声をかけると、荒い吐息混じりに炭治郎が蕩けそうな声で答える。

「はあ、ああ……い……今は……胸……が、ずっと熱くて……ちんこもずっと……はあ、気持ちよくて、ずっと出っぱなしで……胎の中が、ああ……！ゴリゴリされてっ……！ふああ、そこ、あんまり強くしないで、また深くイッちゃう……」

大蛇に正常位で犯され続けて、ほぼ降りられない絶頂を長時間味わい続けて、炭治郎の意識は完全に愉悅に埋没してしまっていた。

その様子を見て無惨は鼻で小さく笑い、喘ぐ炭治郎の口元に顔を寄せると、

「さあ、もっと気持ちいいことをしてやるぞ？正気に戻れ炭治郎」と囁き、口づけをして舌を絡めて炭治郎に唾液を嚙下させる。

「んぐっ！ん、は、ああああ……っ」

光がなかった炭治郎の目に力が戻り、熱に浮かされていた蕩けた表情が少しずつ意思を持ったものに成り代わった。

「んんんっ……！あああつ！はああつ！ああつ！む、無惨っ……！」

正気を保つために無意識に快樂へ身を任せていた炭治郎だったが、無理矢理意識を戻されて改めて激悦の中に放り込まれてしまう。

「あああああつ！ああつ！あつ！あつ！うあああつ！も、もういい加減に、はああ、終われっ……！」

奥歯を噛み締めて激悦に涙を流し、腰を振りたくつて暴れ、炭治郎の身体は活発さを取り戻した。

「そうだな、そろそろこの遊びは終わらせてやろう」

無惨がそう言うと、上下に激しく動いていた大蛇が動きを止め、のしかかっていた炭治郎の胸の上から両足の間に向かつて滑り降り、胎内深くに挿入された尻尾も引き上げられてゆく。

「つ……！あああつ！あああああ——！！」

激烈な引き抜き抜きの快感に炭治郎が身体を暴れさせ、身体中の汗を飛ばして悶絶する。長く続いた引き抜きはあはあと荒い息を吐き、胸を上下に動かしながら必死に身体を沈めようとする。しかし5時間に渡って

絶頂感を味わっていた身体は、簡単には静まらない。

「今が一番毒の効いているときか？丁度いい」

余韻で身体をヒクつかせている炭治郎を見下ろし、その弄られ倒した桜色を戯れでつま弾いてやる。

「あああああつ！」

炭治郎の背中が弓なりに反り返り、それだけで絶頂したかのような強い反応に、いたずら心がくすぐられる。

しかし無惨はそれ以上手を出すことはせず、また炭治郎の耳元へ囁く。

「ずっと蛇に犯されて相当気持ちよかったようだな？炭治郎。しかし、違うだろうか？お前が好きなのは胎の中に射精されることだ。この五時間の間、一度でも中で射精されたか？」

「……い、今は、それは……」

掠れた声で炭治郎が無惨から目を逸らしながら拒絶の意思を示す。無惨はそれを見てさらに言葉を続けた。

「炭治郎、前にも言っただろう？気持ちいいのは悪いことじゃない。むしろ良いことなんだ。お前の身体は幸い普通の人間と違って、快感を受け入れられる器が広い。通常では味わえない高みまで快感を味わえるなど、これこそ至上の悦楽というものじゃないか？」

「……」

「気持ちよくなかったか？今まで」

無惨は炭治郎の雛先を鷲掴み、ゆっくりと上下に擦り立ててやる。

「うああああっ！よかった！よかったから、これ以上はやめてくれ……！」

性感神経がむき出しになったかのような器官を刺激され、首を左右に激しく振りたくり、炭治郎は泣き声で叫んだ。

「そうだろう？気持ちよかっただろう？まだこれからだぞ……。これまで感じていた快感が馬鹿らしくなるほどの快感を与えてやろう。この愉悦を与えられるのは私だけだぞ？炭治郎」

そう言って再び炭治郎に口づけ、口腔に舌を差し込んで荒らすが、無惨の舌は人間離れしていて、一枚のはずなのに何枚もあるような舌の動きをして、炭治郎の口の弱いところを一斉に責め立ててくる。

「んぐぐっ……んんっ！んん——！」

後頭部に甘い痺れが走り、光を取り戻した炭治郎の瞳が再び濁ってゆく。口で絶頂を迎え、ようやく無惨に唇を離されたとき、炭治郎の身体は再び我慢し難いほどに火照り切っていた。

「はあ、はあ、はあ、はあ……」

無惨は炭治郎を犯していた大蛇を掴み、肩に絡めてその野太い胴体の一部を触り、指を掻き挿れた。その後、無惨が穿った穴から二本の太い異形をした棒が突き出され、それを見せられた炭治郎は慄いてしまふ。

「なっ、なんだそれはっ……！」

震える炭治郎の声に、無惨はその棒を撫でながら愉快そうに言い放った。

「この蛇の陰茎だ。へミペニスと言つて、爬虫類は普段身体の中に陰茎をしまつてあるのだよ。しかし、さすがにこいつも興奮したらしい。お前を本格的に犯したいと思つているようだぞ？」

その棒は、先端は人間の陰茎と同じ形をしているが、くびれを越えて下の部分、竿の部分がブラシのように毛羽立ち、ひたひたと粘液を零し続けている。それが縦に二本も生えているのだ。

「へミペニスは射精はしない。陰茎に精液を染み込ませてゆっくり雌を犯すのだが、こいつは特別だ。お前の望む大量の中出し射精を、存分にしてくれるぞ？」

無惨は大蛇を炭治郎の両足の間に下ろし、大蛇は炭治郎の身体の上に這い上がつて、自らの猛った凶悪な雄を見せつけてくる。

「あっ……ぐっ、い、いやだ、こんなもの絶対に嫌だ！」

薄い肌色をした無垢な色だが、その形状は凶悪極まりない。ブラシ状になった胴部分は、さらに炭治郎の目の前で振動する動きまで見せ、粘液を垂らしながら脈動している。この五時間ずっと犯され、絶頂させられていたが、でこぼこのないツルリとした蛇の表面で胎を操作されても意識は飛んだ。それが、目の前のような凶悪な形をした雄に犯されるなど、どんな刺激が与えられるのか、考えたくもない。



「お前に拒否権はない。さあ、存分に可愛がってもらえ」

「うあつ！いや、嫌だ、嫌だーっ！」

喉が裂けそうなほどの叫び声を上げるが、大蛇には響かない。

両手両足を拘束され、両足を左右に開かされて膝から吊られている炭治郎に、これから行われる凌辱行為から逃れられるわけもないのだ。それでなくとも、百回近く噛まれて注ぎ込まれた蛇の淫毒が体中を余すところなく駆け巡り、自分の吐息でも感じてしまうほど、肌は鋭敏になってしまっている。

大蛇が炭治郎の身体の上でくねり、その雄を秘孔へ密着させてくる。爬虫類らしく冷たさを感じるその異様な雄に炭治郎は怖気を隠し切れなかった。

「うああつ！嫌だ、嫌だ、無惨、止めさせろ、っ、あ、ああああああつ！」

数時間の凌辱で迎え入れるのに慣れた身体と、大蛇の雄から垂れる粘液で、簡単に挿入されてしまった。凶悪な形をしているとはいえ、これまで炭治郎を犯していた大蛇の胴体よりは細いので、挿らないはずはない。しかし、大蛇の胴体とは違って、挿入された瞬間、灼け付くような熱を感じて、炭治郎は困惑の声を上げた。

「うあああつ！熱い、熱いいいっ！な、なんだこれっ！あああつ！」

洞内の壁の隅々にまでじゅわあ・・・と染み込んでゆく我慢ぎりぎりの高温に、炭治郎が叫び声を上げる。

「その蛇の陰茎からは絶えず精液が分泌されている。ちなみに、その精液はこれまでの蛇どもの淫毒の比ではないほど強力だぞ？早く蛇を満足させて抜いてもらわないと、お前は本当に狂うかもな」

小さく笑いながら、無惨は残酷な事実を教える。そんな話を聞かされても、炭治郎は戦慄するしかない。拘束されている四肢は動かせず、身体はすでに強烈な発情状態で、すでに大蛇の雄は胎内に迎え入れてしまっている。しかも、淫毒の比ではないと言われた強力な媚薬成分を持った精液を、敏感な洞内に染み渡らせながら、大蛇の雄は胎内を奥深くまで進んでゆく。

亀頭部分を通過すると、次に待ち受けるのは粘液を纏ったブラシ状の凶悪な部分だ。大蛇は容赦なく炭治郎の胎に雄を突き挿れ、異物を挿入されなくても勝手に快感を拾う身体に快感を叩き込む。

「んぐうううう——！！」

性感神経がむき出しになったかのように鋭敏になった胎内に、このブラシ部分の刺激は強烈すぎる。さらにそこから分泌される粘液に灼け付くような熱を注ぎ込まれ、炭治郎は挿入されただけで達悦してしまう。  
(あっ・・・も、もう腰が蕩けそうだ・・・まだ挿れられただけに・・・)

しかし炭治郎を追い詰めるのは胎内の雄だけではなく、二本に分かれた一方の雄も炭治郎を快楽で苦しめていた。広げられた両足の間にもう一本の雄のしかかり、淫毒粘液を分泌しながら、炭治郎の雛先を下に敷いてブラシ部分でゾリゾリと扱き上げるのだ。

「あああっ・・・！ああ、あああああっ・・・！」

あまりの刺激と快感に炭治郎の腰はすでに蕩け、先端から白液を吐き出してしまう。

(ま、前も、後ろも・・・同時に・・・こんなの、耐えられない・・・)

胎内に挿入された雄は、ブラシ部分で内壁を容赦なく擦り立てながら、どんどん奥へと突き進んでゆく。かなりの伸縮性を持っているのか、ブラシ部分が内壁を満たし、先端が結腸部分に辿り着いて、そこを殴打された瞬間、炭治郎は胎で絶頂を迎えた。

「っ……かつ……はっ……！」

あまりの衝撃にまともに声を上げることができず、炭治郎は身体を仰け反らせて快楽の反応を示す。

「どうやら奥まで挿ったようだな。さあ、これからどんどん好くなるぞ。よかったな、嬉しいだろう炭治郎」

「んぐぐっ……う、れ、しくなんて……！ああああっ！」

※中略※

「んんんっ！んぐううっ……はあ、はあ、はああ……」

両足を肩幅より広く開かされ、淫鬼の分厚くて長い舌が、触手のように伸びて鼠径部を責める。

種玉を時折巻き込みながら会陰を素早く前後に舐め擦られ、ここでも絶頂がせりあがるのに、やはり達することができない。

雛先には二匹の淫鬼がとり付き、分厚くて柔らかい舌と細くて硬い舌で同時に嬲られている。

細い舌の淫鬼の舌は先端にゆくほど細くなり、末端は糸のように細い。それを尿道に差し込み、激しくズボズボと抽挿するのだ。

「っ……っ……っ！あ、あああああっ！」

尿道の最奥に当たると絶頂に等しい激悦が訪れるが、それでも絶頂ではない。尿道を騷られながら柔らかい舌が雛先に巻き付き、ぬるぬると上下に摩擦して蕩ける悦を与えてくる。

「ふああ……っ！あつ、あ、あああつ、あ、ああ……っ」

前後の愉悦で炭治郎の両足は小刻みに震え、達せられない激しい疼きで全身の肌が煮立ちそうだ。

「んんっ、も、もう無理、ダメだ、い、イキたいっ……！イカせてくれっ……！」

絞り出すような声で炭治郎は懇願するが、淫鬼たちは互いの顔を見て嫌味な笑いを浮かべ、さらに激しく炭治郎を舐めまわす。

「あっあああっ！うあああっ！も、もうイカせてえええっ！」

炭治郎の瑞々しい身体がビクンビクンと激しく痙攣し、快樂の限界を訴える。しかし淫鬼たちは舌責めを止めず、炭治郎を騷る言葉を投げかけてくる。

「イキたいっってお願いの割には、上から視線だなあ。イカせてください、だろ？」

炭治郎の唇を舐めながら淫鬼が嗤いながら言うが、絶頂の一心しかない炭治郎は必死に叫んだ。

「い……イカせて、ください……！イカせてください！」

しかし淫鬼たちの舌責めが激しくなるだけで、絶頂は一向に訪れてくれない。

「うあああっ！なんで、言ったのに、なんでっ……イカせてくださいって……！」

簡単に裏切られて炭治郎が喚くが、淫鬼たちは不穏な笑いを浮かべるだけだ。

「そんな薄っぺらいお願いじゃあなあ……」

「まずは俺たちをイカせてから自分が気持ちよくなるべき、とか思わねえの？」

そう言つて淫鬼が猛つた剛直に炭治郎の顔に突き出し、寸止め快楽を食らっている朱い顔に密着させる。淫鬼特有の決して良い臭いではないのに、性感を刺激するベトリとした香りが炭治郎の鼻をつき、腰の奥が甘く痺れてしまう。

淫鬼の意図をくみ取つた炭治郎は、その鬼の剛直を口に含み、口の中で舌を暴れさせて感じさせる。これまでの度重なる凌辱で、すっかり口淫に慣れてしまつた炭治郎の口の技巧は、淫鬼たちを悦ばせる戯れの一つとなつていた。

「おら、口だけじゃなくてお手でも使うんだよ」

「次がつかえてるから身体中で奉仕しろよ？」

炭治郎は差し出された二本の剛直を左右それぞれに握りしめ、身体で覚え込まされた技巧を使つて鬼たちに奉仕する。仰向けに寝そべつた鬼の上に座らされ、炭治郎の雛先と鬼の剛直が擦れ合う位置で両足首を掴まれたかと思うと、背後から鬼が抱き着いてきて、炭治郎の柔らかい双丘に剛直を挟み込んで上下に激しく擦る。

胎内に挿入されて、奥に精液を大量に吐き出されて、存分に果てたい、と炭治郎は欲望を募らせていたが、鬼たちは炭治郎を気持ちよくさせるつもりはないらしい。

ゾリゾリと擦れる雛先と硬い剛直の快感で身体が縦に震え、挿入してほしい秘孔は入り口だけを摩擦されて奥を切なくさせる。

「んんっ、んんっ、んんっ、ん、ん、んんっ……」

炭治郎の口の前には三本の剛直が突き出され、それらを代わる代わる口に啞えて愛撫し、炭治郎は汗まみれになって、鬼たちのいいように奉仕する。

左右の剛直を激しく上下に擦り立て、口で一本を啞えようと、あとの二本が炭治郎のまろい頬へ先端を擦りつけて、早くしろ、と急き立てるように馴らしてゆく。

「全身でご奉仕してくれるなんて嬉しいねえ」

「おっと、まだここも空いてたなあ」

炭治郎の背後から二人の鬼が迫り、その腋の左右に剛直を突き入れ、挟み込ませて鬼は腰を振る。

（な、なんてところまで・・・！）

身中で犯してくる鬼たちに憤りを感じたが、今は絶頂するしか考えられない。しかし、炭治郎が屈辱を感じるのはまだまだこれからだった。

「綺麗な赤毛だな、ここも使わせてもらおうぜ！」

炭治郎の括り上げた長髪をほどき、その髪を絡めながら、鬼は炭治郎の頭皮に剛直を擦りつける。

「んんんっ・・・！」

（そ、そんなところまで・・・！）

炭治郎はあまりの無体に怒りを通り越して驚愕したが、頭へさらに二本、剛直の熱さを感じて慄いた。

一人で十二人の淫鬼を同時に相手して、炭治郎は鬼たちの先走りの淫液で体中をドロドロにさせていた。穢れた液で素肌を濡れ光らせる被虐の少年に興奮し、淫鬼たちはさらに炭治郎に激しい奉仕を強要する。

「もっと舌を使って先っぽを激しく舐めるんだよ」

「おら、爪立てたら承知しねえぞ。ただ上下に擦ってるだけじゃ気持ちよくなえぞ？自分でも触って、気持ちいいと思うところを触れ」

「もつと腰を動かして、ちんこを擦りつけるんだ・・・もつと気持ちよくなるぜ？」

「ここにブチ込んで欲しいか？可愛い入口がヒクヒクしてらあ・・・」  
(う、うるさい、黙れ！)

「んんっ！んっ！ぐ、はあ、んぶっ・・・ちゅっ・・・ちゅ、んぶうっ・・・」

身体中を犯しまくる淫鬼たちの剛直の感触が、次第に愉悦に切り替わってくる。淫鬼たちの妖気に当てられて炭治郎の身体は強力な媚薬を飲むに等しい身体の状態になっていて、触れられるどこもかしこも気持ちが良い。

「おお、いいぞ、そのまま吸い上げろ・・・」

「へへ、いっぺんにかけて精液まみれにしてやる！」

「この赤毛も白とまじってピンクになるかな？」

そう言って鬼たちは笑い合い、さらに激しく炭治郎の身体を使って射精絶頂へと昇りつめようとする。

あちこちで激しく擦られ、煽られる炭治郎は、身体をガクガクと震わせて、手と口だけしか、碌に動作することができなかつた。

(身体中熱い・・・こ、こんなものまで気持ちよくなるのか？バカな！いやだ・・・！)

しかし淫鬼の剛直で口を塞がれると、むせ返るほどの淫気をまともに受けて、頭が正常に作動せず、酩酊状態になって炭治郎は奉仕に夢中になる。

「よし、俺は出すぞ！」

「俺もだ、もうちよつと・・・！」

「ほら、先っぽをもっと強く擦れ！自分で気持ちいいところだぞ？巫子ちゃん」

射精を間近に備えた鬼たちの淫気はすさまじく、擦られている雛先からは剛直の熱が伝わって、射精してないのに十分気持ちよく、入り口だけを激しく摩擦される秘孔がゾクゾクするほど心地よい。

「出すぞ、出すぞ！」

「全部飲め！」

「ぶっかけてやる！」

炭治郎の口を犯していた鬼の剛直が最初に爆ぜたかと思うと、炭治郎に相手をされていなかった鬼は自分で擦って射精して炭治郎の顔面に勢いよく噴きかけ、両手の剛直も精液を吐き出して両手を穢す。

雛先も秘孔も腋でも射精され、股座は白くドロドロに、わき腹からも精液が滴っている。赤い髪の間にも淫鬼三匹分の精液を吐き出され、頭皮に熱い液体の流動を感じてうなじから背筋までをゾクリと快感が走る。

「おら、ちゃんと飲めよ？口開けて確かめるからな！」

最後に炭治郎に口淫させていた鬼が爆ぜ、その小さな口の中に大量の精液を注ぎ込み、炭治郎は飲料のようにそれをごくごくと飲み干した。

淫鬼たちの精力は絶倫だ。体中を精液まみれにされ、身体中のあちこちを白化粧された炭治郎は、ようやく終わった被虐の時間に安心し、頭をただ呆けさせた。



むせ返る精液の臭いを充満させた寝具の上に、炭治郎が打ち捨てられる。ベッドへ仰向けにさせられた炭治郎は、鬼たちに懇願した。

「も、もう・・・いいだろう、頼むから、果てさせて・・・くれ・・・っ」

それを聞かされ、鬼が戯れに雛先を上下に扱いて、炭治郎をああああ、と身悶えさせる。

「そうだなあ、俺たち全員をイカせられたら考えてやるよ」

「はあ、はあ、そ、そんな・・・」

一人の淫鬼が炭治郎の両足を左右に大きく開かせて、秘孔も晒される。さきほど射精された淫鬼の精液が股座をひたひたにし、秘孔までを濡らしている。

「舌で舐めたときは中の具合は最高だったなあ・・・さぞ、俺たちを愉ませてくれるんだろうな？」

「ううっ、ぐっ・・・!」

(いやだ、でも、イキたい・・・)

炭治郎が歯を食いしばって屈辱と欲望で葛藤している間に、淫鬼は腰を進めて炭治郎の胎内に剛直を挿入した。

「んっ!あ、あああっ!」

入口ばかりを刺激されて、実は疼きまくっていた胎内をようやく荒され、その快感に炭治郎は背中を仰け反らせて感じ入る。

「おお、すげえ・・・そこの女とも全然違う・・・吸い付いてくるようだ。そういえば、イキたくてしやうがないんだっけ?はは、食らいつついるのか?淫乱だな」

「はああ・・・あつ！あつ！あつ！あつ！」

そのまま激しく挿挿され、炭治郎の口から艶声が零れる。その口に、髪の毛に吐き出された精液が額を伝い、口腔に入り込んでくる。

挿入されるだけで喉元まで愉悅がこみあげ、達悦に向かって性感神経は動き出すが、その果ては何があるうとも突き抜けることができない。

炭治郎には射精欲求だけが蓄積し、なんとか絶頂できないものかと自ら腰を振って剛直を迎えるが、やはり絶頂近い快楽は感じるというのに、果てることができない。

「くううっ・・・！ううっ・・・！い、イキたい・・・、はあ、はあ・・・」

涙ながらに懇願する炭治郎を見て淫鬼たちは精液を小便のように身体中に噴きかけながら、それぞれがのしりの言葉を浴びせて嗤う。

「くく、随分従順になっちまったなあ・・・あれだけ反抗的だったのに、もう抵抗しないのか？」

「まるで発情した雌犬だな。自分で腰を振ってるぜ」

「焦らされているのが相当辛いようだな・・・あれだけ高飛車だった巫子さまが、ここまで墮ちるなんてな・・・」

「ほら、精液をごくごく飲んだらイケるかもしれないぜ？」

炭治郎の喘ぐ口に剛直を突き入れ、後頭部を掴んで無理矢理上下に動かし始める。両手には当然のように肉棒が掴まれていて、絶えず奉仕を強要されている。

「んんっ、んぐっ、んむっ、くっ、んんんっ・・・！」

淫鬼たちに好き放題言われるが、炭治郎は言い返せない。

快感を高める調育をこのまま施され、炭治郎の精神力は限界近くになっていた。体中の絶頂できる性感帯の全てがズキズキと熱を持って、我慢しがたいほどに疼いている。雛先や秘孔、桜色に触れられれば快感は得られるが、絶頂することはできない。

「んんんっ、ん、んぐっ！ごく、ごく……んっ、ちゅっ……」

「よし、いい子だ。よく飲んだな。ケツにも射精してやるよ」

炭治郎の胎内を穿っていた淫鬼が腰の動きを激しくし、炭治郎に絶頂寸前で一番気持ちいい瞬間が延々と続く快感を続けられ、炭治郎は今度こそ絶頂できるかもしれない、と望みを持ったが、淫鬼に激しく身体を散々荒され、大量に中出し射精されても、炭治郎はやはり果てることができない。

「ん、んんんっ……！あ、熱いっ……はあ、ああああ……」

※中略※

囚われ始めの頃はあれだけ拒絶していた快感が、徐々に炭治郎の身体に馴染み、この肌はすぐに快感を拾ってしまふように変化させられ、快感への抵抗はすっかり摩耗してしまっていた。

「その程度で私を悦ばせられると思うな。そうだな、今日は面白い趣向を用意しよう。お前の口淫が上達するように、特別にやってみよう」

すると無惨は上体を起き上がらせ、炭治郎の雛先を握り込んできた。

「うくっ・・・何を・・・！」

無惨に身体のどこを触られても、すでにゾクリとする快感を拾ってしまう炭治郎の肌に、無惨から直接与えられる雛先への刺激は、すぐにでも吐精しそうなほどに甘美で、憎しみも屈辱も、なにもかも忘れてしまいたいそうだった。

すると握り締められた部分が急に熱くなり、火傷するのかと思われるほどの熱量が雛先を駆け抜け、炭治郎は身体を仰け反らせて身悶えた。

「あああああっ！」

しかし痛みは切り替わる直前の激感が続くだけで、それが段々快感に変わってゆく。その愉悦に炭治郎は飲み込み切れなかった生唾を口の端から垂らし、意識せず吐精していた。

「まったくはしたない股だ・・・私が特別に施術してやったから、これで奉仕も上達するだろう。さあ、炭治郎・・・」

無惨はまた寝そべるが、強烈な射精絶頂を迎えたばかりの炭治郎はベッドの上に倒れ伏し、吐精の余韻で腰を痙攣させて、シーツに顔を擦りつけている。

「んっ・・・ん、はあ・・・」

「本当にしようがない奴だ」

また触手が炭治郎の身体を起き上がらせ、無惨の身体の上へ覆い被さるように位置どらせる。

自分が何をされたのかわからないまま、炭治郎は淫熱を孕んだ身体を持って余しながら、後頭部を掴まれて再び剛直を含まされる。

「んっ・・・！」

その瞬間、雛先に熱くてぬめる感触があり、炭治郎はまた触手が触れたのだろうか、邪魔だ、と思いつながらそのまま無惨の剛直に奉仕を続ける。しかし、自分の舌が触れる度、唇で口づけをする度に、炭治郎の雛先に無惨に愛撫するそのままに等しい感覚が伝わってくる。

唇は熱く柔らかく、舌は熱くて柔らかくなったり硬くなったりして先端部分を乱舞し、炭治郎を堪らない気持ちにさせる。

「んっ！んんっ！ぷは、む、無惨、何をした・・・！」

口淫から顔を上げて無惨に問いかけるが、後頭部を掴まれて剛直を頬張らされ、そのまま上下に激しく動かされる。

「んっ！んんっ！んっ！ん、んあっあ、あぐっ、んぐ、んんっ！んん——！」

雛先に熱くて耐え難い愉悦が走破し、炭治郎は当惑するが、無惨に口淫を強要されて、その唇と、暴れる舌の動きがそのまま雛先に伝わってくるようだ。

（こ、これはもしかして、俺の身体に伝わってるのか・・・？）

信じられない思いで炭治郎は目を見開きながら、無惨に奉仕するままの感覚が自分に伝わってきているのだと理解した。

（ダメだ、こんなことをされたら何もできない・・・！動け・・・ない・・・）

無惨に物のように無理矢理口を上下させられて、雛先に感じる快感が止まらない。ゾクゾクつと背中に快感が走ったと思つた瞬間、炭治郎はまた吐精してしまつていた。しかし、無惨は頭を上下させる動きを止めない。

「んぐっ！んんっ、んっ！んっ！んんっ！んん——！」

腰が痺れ切り、達悦の愉悦が下半身を包み込んでいるのに、まだその快楽は続けられる。継続する雛先への快感に、炭治郎はさほど間隔を置かず、再び吐精してしまつていた。

ようやく無惨から手を離され、炭治郎は息継ぎをすることができた。

顔は紅潮し、腫からは涙が零れている。連続して達悦した腰から下はぞく、ぞく、と愉悦に痙攣し、快楽で何も考えられなくなってしまう。

「さあどうだ、炭治郎。お前も気持ちよくなるようにしてやったぞ。私は優しいからな。こうすると、自分の身体で好い部分を探つて私に奉仕できるだろう？」

少し笑つて、ベッドに四つん這いで息を吐く炭治郎を見ながら、無惨はその顎を取つて再び奉仕を続けさせようとする。

「くっ・・・変態め・・・」

炭治郎の言葉を聞いて、無惨は激高するどころか、さらに妖しい笑みを浮かべた。

「その威勢の良さは気に入っている。簡単に墮落せず、最後は快楽に身悶えながら、結局悦楽の奴隷になる姿は堪らない愛くるしさだよ、炭治郎」

無惨に自分の無様を笑われて、炭治郎は怒りを募らせたが、まだ快楽で痺れ切った身体ではその怒りの炎も十分に燃え上がらない。

「さあ、奉仕しろ。二度は言わんぞ」

その言葉に炭治郎は怖気を感じてしまった。無惨のこの物言いは本当に二度目はない。従わなければ、淫鬼や触手、機械による淫獄に放り込まれ、自分の言動を死ぬほど後悔させられるのだ。

「……っ、くそっ……!」

炭治郎は無惨の両足の間に頭を埋め、恐る恐るその硬い剛直に舌をねっとり下から上へ這わせた。やはり、自分の雛先でも同じ感覚が伝わってくる。

「ひぐっ……!」

自分の舌がこんなに熱くて気持ちのいいものだとは知らなかった炭治郎は、戸惑い、嬌声を上げて一旦愛撫を止めてしまう。

「どうした？続ける」

冷淡な無惨の声が炭治郎の耳朵を打ち、否応もなく炭治郎は剛直への愛撫を再開した。

しかし、舌で少し舐ただけで、先端を口で吸ただけで、腰がカクカクと揺れてしまうほどの快楽が雛先に訪れてくる。

快感が甘すぎて、炭治郎は激しい愛撫をすることができず、無惨はいつまで経っても反応が変わらない。

「がっかりだよ炭治郎。気合を入れて奉仕しろ。自分の快楽に浸って相手を愉しませられないなど、淫乱失格だ」

「んっ……誰が、淫乱……」

「淫乱なんだよ。その証拠に、お前は身体で感じる快楽を我慢できず、私に奉仕できていない。しつかりやらなければ……わかっているだろう？」

また空恐ろしい宣告をされ、炭治郎は屈辱を感じながら無惨の剛直に舌を這わせる。しかし、身体で感じる快感が峻烈すぎてうまく口淫ができない。

「はあ、はあ、はあ……」

「炭治郎、私の言葉を忘れたか？お前は淫乱なんだ。身体は快楽が欲しくてしょうがないんだ。自分で快楽を感じているのは、歓喜だ。悦びと思つて受け止める。お前は気持ちいいのが好きなんだ。今更カマトトぶるなど、笑止だぞ」

無惨に暗示のように語り掛けられ、炭治郎の意識がまた侵食される。

(俺は淫乱……)

「炭治郎、気持ちのいいことは良いことだ。何度も教えているだろう？」

無惨はそう言つてくくつと笑い、炭治郎の理性の薄氷にひびが入った。

(気持ちいいのは良いこと……俺は淫乱……)

その言葉が炭治郎の脳内から波打つて打ち寄せてきて、自分の本性を暴かれた羞恥と、快楽を抑制するタガが外れるのを感じた。

「んっ、んん……」



炭治郎は思い切って無惨の剛直を根元まで飲み込み、その快感が雛先に伝わるのを背中を震わせて受け止めた。

（ふああ・・・っ！たまらない、熱い、柔らかい、気持ちいい・・・でも、気持ちいいのは良いことなんだ・・・）

喉奥にまで届いている無惨の先端が、炭治郎が喉を鳴らすたびに脈動して、それが全て雛先に伝わってくる。まるで生き物のような自らの喉奥の動きに炭治郎は腰を妖しく揺らして、快楽に悶える。

（お、俺の口の中、こんなに・・・気持ちいいのか・・・？）

自分では信じられない思いに囚われながら、炭治郎は喉奥の口淫を止められない。雛先全体が熱い粘膜で覆い尽くされる感触と、そこも動いて、裏筋が舌で擦られる感触に我慢ができず、炭治郎は雛先からどんな淫液を垂らした。

「んぐ、んっ、んんっ、んっ・・・」

鼻で必死に息をしながら、炭治郎は口を上下にゆっくり動かして奉仕を続ける。動きが速くなってしまうと、快楽に耐えられず倒れ伏してしまいそうになるのだ。

「炭治郎、快楽は良いことだぞ？どんどん受け入れて、もっと気持ちよくなるんだ。ほら、こうされると堪らないだろう？」

すると炭治郎の秘孔にヌルつく触手があてがわれ、そこへ押し入ろうとしてグリグリと性感帯を穿り始める。

「っ！あ、あああっ！んぐううう・・・んぶ、んん、んっ、んっ・・・」

ただでさえ快楽の強い下半身へさらに違う色の快感を重ねられ、炭治郎の身体の淫熱はさらに高まってゆく。心では否定し続けるが、身体はすでに愉悦を欲して疼き、秘孔を上下にジュルジュルと撫でる触手の動きに胎の中が熱を持つ。

口は無惨の先端を包んでそのくびれを硬くした舌で探るように舐め回すが、その愉悦がそのまま自分の雛先にも返って来て、炭治郎は何度も動きを止めてしまう。

無惨は全く射精の気配を見せないのに、自分の身体は吐精寸前だ。淫鬼たちに奉仕をして喜ぶ部分を舐ろうと舌を延ばすが、自分で触れていると感じると、腰が跳ね上がるほど感じてしまう。

(お、俺の口の中・・・こんなに・・・)

両手を使って雄珠や茎を扱く感覚も、自分に伝わってくる。正直、気持ちよくて堪らない。

腰の奥がゾクゾクして胎の奥が切なくなり、雛先からはとめどなく透明の淫液が零れ落ちる。

少しづつ理性が薄らいでゆき、ただ悦楽を感じただけの欲望が肥大化し、無惨に対する反抗心などで互解しつつある。

何度も粘液を纏ったブラシ触手で秘孔をなぞられ、淫らな淫蜜が零れ、炭治郎の両の大腿を伝ってゆく様が眩暈を起こしそうなほどに淫らだ。

触手は時々わざと狙いを外して炭治郎の両足の間に滑り込み、雛先をいたずらに擦り上げる。口の愉悦だけですでに射精寸前に快楽を味わっている炭治郎は、自分の口の刺激も重なって尋常ではない快感を与えられ、その強烈さに背中を仰げ反らせて吐精する。

※中略※

薄暗いホールに、質の良さそうなスーツに身に包んだ男たちが、グラスを片手に談笑をしている。点在しているテーブルには、ワインのつまみに丁度よさそうな菓子や軽食、フルーツが並べられ、男たちの吐く煙草も上物であることは違いない。

「んっ、ぐっ、無惨・・・こんなこと、本気かっ・・・！」

炭治郎はベッドと言い換えても良い大きく丸いソファの上に仰向けで転がされているが、両足は左右に大きく開かれ、膝を立たされて足首を拘束されている。

両腕は耳の左右の位置で手首を拘束され、肘ぐらいなら自由になるが、それができたところで炭治郎には何も抵抗する術がない。腰の下にクッションを挟まれ、臀部が浮かされた体勢にさせられているが、炭治郎の秘孔にはすでに無惨の陰気を注入されたバイブが挿入されている。ズキズキと絶えず快楽を炭治郎の身体に流し、早くも激しい欲情を捉えている。

裸の身体は淫欲で少し汗ばみ、痣の形も変わって赫い目はキラキラと光っている。炭治郎の吐息は熱く、雛先は下腹につくほど反応していた。さらに屈辱を煽るように、炭治郎の雛先には赤いリボンが巻き付けられ、飾られている。

「これまで散々遊んできただろう？無償で延々と人外の快楽を得られるのは、世の摂理に釣り合わないと思わないか？だから、今日はその分だけ、お前に働いてもらおうというだけだよ」

「っ、くっ・・・下種め・・・っ！」

これまで無惨本人や淫鬼に責められ続けていたが、炭治郎は、無惨は自分を手元から離さないだろう、と無意識に思ってしまった。しかし、これから受ける仕打ちを思うと、その考えは甘かったと言える。落胆と、これから行われる屈辱を思うと、炭治郎は悔しさと涙が出そうだった。

「さあ、ショータイムだ。精々可愛がってもらって、私の事業に貢献してくれ」

無惨は指一本分ほどの長さの枷を取り出すと、炭治郎の口に掛けて言葉を発せないように塞いだ。

「んんっ！んんっ！んん——！」

抗議のように炭治郎が怒気を孕んで呻くが、無惨は構わずソファについた取っ手を握り、大勢がたむろするホールへと移動させてゆく。

暗い入口から大型の装置が運ばれて来たのに気づき、男たちが炭治郎の周りに集まってくる。

「ほお、これは可愛らしい・・・」

「今日の主賓は美少年ですか。珍しいですね、しかもこんなに若いなんて、月彦くんの趣味かな？」

群がってきた男たちが、少々興奮の面持ちで炭治郎の珠玉の裸へ無遠慮な視線を向けてくる。

見ず知らずの者たちに裸を見られている羞恥で、炭治郎は首を傾けて柔らかい背中の中のクツションに顔を埋めた。

「ふふ、この子は赫子（かぐね）と言いました、火を扱う家に生まれると縁起が良いと言われている、特殊な変異体質なんですよ。それに、房中術の心得も多少ある巫子の家系で、身体の感度は最上です。皆さんをガツカリさせることはないと思いますよ」

無惨は説明し、炭治郎の顎を取って無理矢理顔を上に向け、その赫い目や赤い髪を周囲に見せつける。

炭治郎の零れそうなほど大きな瞳が羞恥で潤み、演出されたようにその輝きを男たちに見せつけた。

「ほお・・・これは愉しめそうな子を用意してくださいましたな・・・」

「はい、捕えるのに苦労しました。ある程度調教もしましたが、なにせ気が強くて、口枷を取ってしまったら、皆さんに不快を与える言葉を発するでしょうから、しばらくはこのままでお願ひします」

（俺を、こ、こいつらの自由にさせる気か！）

炭治郎は非難の目つきで無惨を見つめるが、無惨は意に介した風もない。

「まだ育成中ですので、身体に傷をつけるのは禁止とさせていただきます。それ以外ならば、たくさん取り揃えておりますので、そちらでお愉しみてください。気絶しても、快楽を与えればすぐに目覚めますから」

「んんー！んっ！んんん！」

（む、無惨っ・・・！）

自分の勝手な扱われように、炭治郎は怒りで顔を紅潮させるが、それよりも身体に逗留し続ける淫熱が邪魔だ。

「それではお愉しみ下さい。普通の性奴隷とは違いますよ」

（せ、性奴隷って・・・！）

俺は性奴隷じゃない、と炭治郎は叫びたかったが、口枷が言葉を遮ってしまふ。

んんん、とだけ呻く炭治郎に興味津々な男たちが、欲を絡めた生臭い息を吐きながら炭治郎の裸体に迫ってくる。

（嫌だ、嫌だ・・・！）

しかし炭治郎が嫌悪を募らせる一方で、男たちは容赦なく炭治郎の極上の裸体に掌を這い回らせてくる。

「おお・・・これは素晴らしい手触りの肌だ・・・ただ若いから、というだけじゃないね」

「すべすべだが、吸い付いても来るようだ。おお、ここなど蕩けそうだな・・・」

「巫子と言ったが、けしからん巫子もいたものだ。しかし美しい瞳だ。ルビーのようだよ。実に綺麗だ」

「欲情が深まると、さらに輝き始めます。なので、皆さんでたくさん愛してやってください」

無惨が少々自慢げに炭治郎の身体を紹介するが、炭治郎は体中を這い回る男たちの手の感触に、少しずつ快楽を拾うようになってしまっていた。

(んんっ・・・こんなヤツらに触られて・・・！)

これまでの淫調教で散々身体の感度の上限を書き換えられ、常に疼くほど情欲渦巻く体にされた炭治郎は、少しの刺激でもすぐに発情してしまう。

身体中を縦横無尽に這い回る男たちの手の感触に、秘孔に挿入されたバイブから流し込まれてくる陰気で、どんどん愉悦が高まってゆく。

「可愛いなあ・・・こんな愛らしい顔に、ギャグが詰められているのが背德的で堪らないよ」

「しかしこの肌の手触りは素晴らしい。いつまでも撫でていたくなるな・・・」

男どもが炭治郎の身体を称賛するが、徐々に上がってゆく疼熱に、炭治郎は嫌悪よりも欲情に身体と心を支配され始め、口枷から熱い吐息を早いペースで繰り出し始める。

「あれ？興奮してきたかな？涎が垂れてきたよ？」

炭治郎の顎を取って口枷をされた顔を見つめ、ニヤついた中年男の顔が迫る。炭治郎はその顔に唾を吐きかけたくなるほどの嫌悪を覚えたが、身体を這い回る男たちの掌の感覚に意識を流されてしまう。

「ここは実に綺麗なピンク色だ。本当に汚れない、と言った感じだね。巫子なんだっけ？なんだか神聖を荒らすカンジが堪らないね」

「んんっ！んんんっ！」

疼きの回った胸の桜色を指先で突かれ、上半身がビクビクと反応してしまう。散々調育された炭治郎の身体は、誰に触られても性的に感じてしまう肌にされてしまっている。しかも、今は無惨の陰気で発情状態にされ、快楽に抗えない態にされている。

「綺麗な子だ・・・肌触りは極上だね。ぜひ一対一でお相手してもらいたいよ・・・」

炭治郎の赤毛を撫でながら、男が顔を覗き込んでくる。炭治郎は口枷を噛み締め、力なく睨み返すだけだ。

（こいつら変態だ・・・こんな奴らに触られているのに、ゾクゾクしてしまうなんて・・・俺の身体はなんて浅ましいんだ・・・！）

すでにふうふうと甘い吐息に変わりつつある呼吸を感じながら、炭治郎は左右に広げられた下半身に、突然走った快感に腰を小さく跳ね上げさせた。

「んんんっ！」

男の一人が炭治郎の雛先を指で捏ね回し、先走りの淫液を掻き回してくる。

「このリボン可愛いねえ。よく似合ってるよ・・・でも、これから遊ぶにはちょっと邪魔だなあ」

雛先へ結ばれた大きな赤いリボンを引っ張り、男が嗤う。きゅ、と絞められるとビク、と炭治郎の細腰が跳ね、身体は締め付けの快感を食ってしまう。

「リボン解くよ？・・・おお、これは、ここも実に綺麗だね・・・」

シウルシウルと赤いリボンが解かれ、炭治郎の雛先の全ての姿が男たちの目に晒されてしまう。一斉に男たちの目が注がれる光景に、炭治郎は強い羞恥を感じて両足を閉じようとするが、強く拘束されていてそれは叶わない。できることは、現実から離れるように、横顔をベッドに埋めることだけだ。

「もう濡れてしまっているな？案外淫乱なんだな。どれ、感度のほどは・・・」  
男の無遠慮な手が炭治郎の雛先を掴み、指先ですると撫で始める。

「んぐぐっ！んんっ、んん・・・っ」

甘い痺れが雛先に走り、炭治郎の下半身が反り返って、雛先の先端から先走りの淫液が零れてしまう。ずっと疼き続けていたそこによりやく刺激が与えられた快感は、炭治郎が思うよりもずっと甘美で強い快楽だった。

「ふふ、少し触っただけで、もうびちゃびちゃに濡らしているよ。悪い子だな」

「ん？尿道に何かあるね？」

炭治郎の雛先の先端に、豆粒程度の物体が埋め込まれている。細かい穴が開いているらしく、先走りを堰き止めてはいないが、その物体には男たちの愉しみをさらに深める仕掛けが成されていることを予感させた。

「巫子くん、これは何かな？見たところ、尿道を堰き止めているようだが・・・」



そうやって一人の男が豆粒を爪弾く。その度に炭治郎の雛先にズンズンと快楽が詰め込まれ、拘束されている両足が痙攣した。

「んんんっ！んんんっ！んっ、んんっ！」

腰をカクカクと引き攣らせ、炭治郎が身悶える。その様を嗔い合いながら男たちが観賞し、豆粒を弄っていた男がそれを掴み始めた。

「苦しそうだから引き抜いてあげよう、ほら……」

（や、やめ、それはダメだ！）

「んんっ！んんっ！んんんっ！」

炭治郎は必死に首を左右に振りたくって男の行為を止めようとするが、当然聞き入れられることはない。ぷちゅ・・・と音を立てて豆粒が先端から引き抜かれるが、そこには糸が繋がっていて、雛先の中へと伸びている。

「おやおやこれは……」

いやらしい笑みを浮かべ、男は豆粒をさらに引っ張ると、尿道から糸に繋がった新たな豆粒がまた吐き出された。

「んぐぐぐっ！んんっ！んんんんっ！」

炭治郎の身体がガクガクと震え、激しい快楽に体中から汗を流し始めている。男に引っ張られる度に雛先の内側で快楽の火花が散り、絶頂に近い快感が連続で訪れる。

「これは尿道ビーズか。まったく、月彦くんもあどけない少年に酷い仕掛けをするもんだ……」

※中略※

「はあ、はあ、あああつ！あつ・・・あああ・・・っ！」  
会場に炭治郎の甘い善がり声が響き渡っている。

秘孔にはアナルパールを二本挿入されており、それを交互に出し挿れをされ、常に稲妻を受けているかのような快感が続けられている。じゅっじゅつと淫らな音をさせながら、一本でも激しかったアナルパール責めを二本に増やされ、炭治郎の性感神経は擦り切れそうだ。

「ああっ！あつ！は、激しいっ・・・！だめ、だめ、ああああつ！」

雛先には、透明で外から中の構造がわかるオナホが装着されて、男の手で、ぐりぐりと左右に連続回転をさせられている。オナホの素材は柔らかいシリコンだが、透明の中身は様々な隆起が見受けられ、角が連続している部分が裏筋と先端を摩擦し、男なら見ているだけで勃起しそうな責めを受けている。

「ふあ、はあ、い、イク、出るっ・・・！」

その直後、炭治郎は雛先の先端から白液を放った。オナホの先端は開いていて、そこから精液が勢いよく放たれて、炭治郎の裸体に降り注ぐ。

どこからともなくボーイ姿の男が数人現れ、炭治郎の身体を濡れタオルやティッシュで清掃し、作業を終えて去っていく。

これをもう三度繰り返させられ、炭治郎はすでに五十は超える射精絶頂とそれを上回る肛悦絶頂を絶えず感じさせられていた。

しかし体力は相変わらず無尽蔵で、精液の量も濃さも変わっていない。

全ては無惨の精液と陰気のせいだが、炭治郎の中の快楽を迎合する無意識の気持ちだが、絶頂を助長している要因の一つでもあった。

「あああつ・・・ふあつ・・・！」

二人の男が炭治郎の両胸の桃色に口を寄せ、それぞれ舌や唇で弄んでいる。舌の生温かい感触と相まって、動き回るぬるぬるした物体に、極限まで性感を高められた炭治郎が耐えられるはずがない。

ピチャピチャと水音を立てながら激しく舐められ吸われ、ずっと巻かれたままの赤い紐リボンが唾液でべトべトだ。

「んんんっ・・・！あ、ああああつ！」

炭治郎の上半身が突然引き攣り、ブルブルと上体を震わせる。もう胸で絶頂させられるのも何回目だろうか。

炭治郎の時間の感覚では、二時間は責められ続けているような気がする。体中で絶頂が連鎖して、数分単位で絶頂させられ続けているのに、炭治郎の身体は疲労がほとんど無く、精液も際限なく出てしまう身体での長時間の責めは、もはや甘い拷問だった。

「ほらほら、このオナホ気持ちいいだろう？先端部分がギザギザになって強烈な刺激があるのに、根元部分でギュって締められて、またギザギザがあるんだ。それも全方向からね・・・」

肌色の小さい女性の下着を模られた淫具に雛先を飲み込まれて上下左右に動かされ、次々と襲ってくる激悦に腰の痙攣が止まらない。

(も、もう無理・・・せめて休ませてくれ・・・！)

炭治郎が再び射精絶頂を迎えそうになった時、輪から少し離れた無惨が、低いが恐ろしく通る声で言った。「みなさん、そろそろお疲れでしょう。ここは小休止して、ワインでもどうでしょうか？ シャトー・ペトリュスがございますよ」

高級ワインを勧められ、男たちが炭治郎から身体を離し、無惨の周囲に群がってゆく。

ソムリエらしい男が数本のワイン瓶を移動テーブルに載せてやってくるのを見て、炭治郎はようやく休憩できる安堵感のため息を吐いた。

(このくだらない見せしめ・・・いつになったら終わるんだ。いい加減にこいつらも帰ってくれ)  
炭治郎は心中でそう毒づきながら、荒い息を整え始めた。

身体中に刻み付けられた淫熱はなかなか収まらず、熱い吐息が止まらない。無惨の精液はまだ完全に浄化できていないし、アナルパールの代わりに胎内には微振動するバイブが挿入されっぱなしで、雛先には極上オナホが取り付けられている。締め付けられているだけで生唾が出そうなほどの出来の淫具に、炭治郎は流されまいと意識を逸らそうとするが、そこで耳に男の言葉が蘇ってくる。

(気持ちいいのは良いこと)

その言葉を思い出した途端、炭治郎の心音はとん、と上がって、身体の興奮が増してしまった。

(なんだ？ どうして、こんなに身体が・・・熱く・・・)

ビビビ、と微振動を続ける胎内のバイブが洞内を刺激してくるのが、涎が出そうなほどに気持ちがいい。ようやく整いかかった吐息が再び荒くなり、炭治郎は自分の身体の変化に戸惑うしかない。

(い、今のうちに少しでも落ち着いて休息しないと・・・でも、どうして身体が勝手に熱く・・・?)  
意識してしまうと、先程まで男二人に舐め廻らされていた桃色が疼き始め、少し身じろぎしたただけでつけられた紐リボンの揺れる動きに感じてしまう。

撫で回され続けていた身体中の肌から一斉に刺激が無くなり、全身がぞわぞわと疼きだす。

「んっ・・・んん・・・」

知らず炭治郎から鼻にかかった甘い声が漏れるが、誰もそれを聞くものはいない。

そして一番辛いのはオナホを嵌められた雛先だ。

嵌められているだけで全方向から絶妙な締め付けで刺激し続け、腰を少し動かすだけで中の襷が擦れて甘美な愉悅が走り、小さく仰け反ってしまう。

(んん、これ、取ってほしい・・・!)

しかし両腕は拘束され、力づくで外そうとしてもガチャガチャと鎖が音を立てるだけだ。

見る間に炭治郎の身体は発情状態に陥り、身体中からしっとりとした汗が染みだしてくる。ぞく、ぞく、と背中に快感が断続的に走り、炭治郎は目を強くつむつたり、眉間に皺を寄せたり、快楽に眉を垂れさせたりと、男たちに廻られている時よりも豊かな表情を取り続ける。

胎内に挿入されたバイブの振動がオナホに捉えられた雛先に伝わり、ますます炭治郎の性感を煽ってくる。秘孔からはトロトロと淫蜜が零れ、雛先からは先走りの淫液が多量に零れ出す。

「うっ・・・」

これまでの二時間、絶頂するのが当たり前になっていた炭治郎の身体だが、中途半端なところで放り出され、絶頂できなかった体が悲鳴を上げ始めている。

額に汗を滲ませて必死に耐えるが、息がどんどん荒くなるだけで身体の淫熱は一向に収まる気配が無い。そんなとき、男たちの輪から離れて、無惨が炭治郎に近づいてきた。

「なんだ、まるで発情した雌猫だな。そんなに舌を出して欲情を露にして、本当に淫乱だな」  
屈辱的な言葉を掛けられて炭治郎は、欲情に浮かされて、ただ反射的に抵抗心が湧き上がり、反抗の言葉を口にした。

「む、無惨・・・！この、ふざけた見世物を、いい加減に止めさせろ・・・！」

「何を言う？なかなか様になっていくぞ？客人も大喜びだ。やはりお前のようなプレミアの高い人間は悦ばれるよ。これで次の商談もうまくいきそうだ」

自分の利益のために利用されているということに炭治郎は無惨に掴みかかろうと怒りを爆発させたが、やはり拘束でそれは叶わなかった。

※中略※

「んっ、はあ、ああ、あっ・・・ああああ・・・」

快楽に声を上げ、目をつむっていた炭治郎だが、薄目を開けると、すぐ右隣りに人がいて、自分の様子をじっと見つめているのに気づいた。

「っ！あ、な、い、いつから……！」

炭治郎は羞恥でようやく指の動きを止めた。

その人物は高級そうな黒を基調にした振袖に、切れ長の瞳をした凄艶な美女だった。着物の合わせ目から覗く白い肌から、むせ返るほどの大人の女の色香が醸し出されていて、瞬き一つせず、自分の姿を見つめるその射る目線に、炭治郎は淫熱に浮かされながらも、羞恥でいたたまれなくなってしまう。

「あ、あなたは……っ？」

炭治郎が誰何すると、美女は突然炭治郎の唇に食らいつき、舌を差し入れてきた。人間ではありえない、何本もの舌が口腔を蹂躪する感覚には覚えがある。

「んっ！んっ！んん——！」

たちまち口で絶頂を迎えさせられ、背筋に甘い痺れが幾筋も伝う。美女と炭治郎の唾液で、炭治郎の唇と顎が濡れ、唇を離されたときに女の正体によくやく気付いた。

「はあ、はあ……む……無惨……？」

すると女は無言で、今度は炭治郎の桜色に両指を絡ませ、伸びた爪を食い込ませて強い刺激を与えてきた。

「あぐっ……！くうううっ……！」

ズキン、と一瞬の痛みがあつたが、その強刺激さえも快感になってしまふ。ぞくぞくと絶頂の愉悦がせり上がり、身体が勝手に快楽を欲しくねってしまう。

「ふん、無様だな。炭治郎」

ようやく発した美女の声は、間違いなく無惨のものだった。喘ぎながら、炭治郎がその美女の目を見ると、無惨のものそのものだ。爬虫類に似た、この世の全てを睥睨する傲岸な瞳が、その奥に光っている。

炭治郎は桜色を抓む無惨の両手首を掴み、離そうとするが、鉄のようにびくともしない。

「ふん、あれだけ自分で耽っておきながら、今更止めるのか？ 私は慈悲深いから、私自らの手で果てさせてやろうというのに、拒むとは随分だな。炭治郎」

自慰の場面をずっと見られていたという羞恥と、今も性感帯を刺激されている快感が織り交ざって、炭治郎はとにかく無惨を拒絶したくて身体を暴れさせた。

「んっ！うう、い、嫌だ！やめろ……っ！あ、あぁっ！んぐうう……っ！」

身体の上のしかかられて、その見た目からは考えられない、岩のように重い体重で動きを止められ、再び無理矢理口づけをされて、口腔と桜色の絶頂で頭を真っ白にさせられてしまう。

「んんっ！んんっ！んんん——！！」

ビリビリと絶頂快感が身体中を駆け巡り、炭治郎はまた、触れられていないのに雛先から白液を吐き出した。

ようやく身体から指を離されて絶頂から降ろされた炭治郎は、薫る熱い吐息が激しく、身体から汗を流して肌を快楽の余韻で未だ僅かに震わせている。

「はぁ、はーっ、はーっ、はぁぁぁ……っ」

すると炭治郎の両手首に嵌められていた拘束が急に動き、抗えない強力な力で引っ張られ、頭を挟んで左右に広げられて縛られてしまう。



「あつ……くそ、無惨っ……!」

不自由にさせられた身体を恨み、無惨を睨みつけようとするが、炭治郎の瞳は快樂ですでに蕩けてしまっていた。

(どうして女の姿に……今度は一体何をする気なんだ?)

いつも炭治郎の想像を超える責めを施し、想像を絶する快感を叩き込んできた無惨だが、今回のはいつもとはかなり毛色が違うと感じながらも、また屈辱的にされると言う事だけは理解できた。

「炭治郎。これまで雌としての愉悦ばかりを感じてきたな。それしか知らないのもそそるが、雄として女の味を知っておくのも悪くないだろう」

無惨のその言葉を聞いて、炭治郎はぞっとした。

「い、嫌だ!それだけは嫌だ!」

首を左右に振って、必死で哀願する炭治郎は珍しい。その姿に無惨はますますつけ上がり、言葉で炭治郎を追い詰めてゆく。

「なんだ炭治郎。女の味を知るの嫌か?まさかとは思うが、最初に抱くのは好いた女でなければ嫌だ、などという古めかしい固定概念を持っているのではないだろうか?」

「……っ!」

「ふん、これまで散々犯されてきて、貞操など呆れる。お前はすでに、童貞でも処女でもない。ただ、快樂を愉しめ、炭治郎……」

そう言うと、女無惨は再び炭治郎に口づけ、想像を絶する技巧で口腔を愛撫し、炭治郎の頭を快樂で霞ませた。

「女を抱くのだから、愛撫が必要だな。お前が上手く手綱をとれるとは思えん故、私がリードしてやろう」  
そう言うと着物の裾を派手に大きく捲り、下半身を全て露にして炭治郎に迫る。無毛のそこにはどう擬態したのか、完璧な女陰があった。

「うっ・・・」

「炭治郎、目を逸らすな。私に失礼だぞ？」

そう言うと、女無惨は炭治郎の身体に覆い被さり、声を上げる間も無く、頭の左右に膝をつき、女陰を炭治郎の顔の上に密着させる。

「んぶっ・・・!!」

炭治郎の口元に生温かいぬめりが押し当てられ、柔肉に包まれて一瞬息が止まってしまった。

女無惨は炭治郎の両足の間に顔を寄せ、触れられず焦がれている雛先を両手で掴み、舌を這わせ始めた。  
「はううっ・・・んぐ!!」

ようやく与えられた下半身の快樂に、炭治郎は声を上げて身悶えするが、無惨の下半身がさらに密着して声を塞がれてしまう。

「情けで奉仕してやっているのだ。お前もしっかり奉仕すべきだろう？」

無惨なのに、むせ返るほどの女の匂いを撒き散らし、炭治郎はその色香で頭がクラクラしていた。それだけでなく、口と鼻に密着されて酸素が薄くなり、呼吸ができなくなってしまう。

(く、苦しい・・・息、できな・・・)

「ちゃんと奉仕しろ。しなければ、そのまま窒息だぞ」

グリグリと顔に媚肉をさらに押し付けられ、炭治郎が身悶える。

(い、嫌だ、こんなの・・・でも、息が・・・)

「んぐっ、んっ・・・れろ・・・」

息苦しさにかけて、炭治郎は唇と舌を使って女陰を愛撫し始める。舌を動かして胎に侵入すると、熱い淫液が溢れて炭治郎の顔を伝った。

「はあ、はあ、んん、んっ、んっ・・・ごくっ・・・んんっ・・・」

流される淫液を飲み込まないと、窒息してしまう。甘美な味さえ感じるような女の体液を吸い込んで、炭治郎の身体はどんどん熱くなつてゆく。

「ふん、相変わらずガキな魔羅だな。しかし、これからちゃんと男にしてやろう。極上の快感でな。私に感謝するんだぞ、炭治郎」

腰を振って炭治郎の顔面に淫液を塗りたくり、炭治郎の必死の愛撫をわざと困難にさせて無惨は愉しむ。両手に持った炭治郎の雛先を見つめると嗤い、その淫液を零す先端に舌を這わせて、腰が蕩ける快感を与え始めた。

「ああっ・・・！は、はあ、あぶっ・・・ん、んん、んちゅ・・・ふっ、ふあ、あぐっ・・・」

下半身に走る愉悦に身悶えたいが、こちらが愛撫を止めると窒息させにかかってくる。炭治郎は拘束された手で必死にシートを掴んで快感を耐えながら、女陰に愛撫を続ける。

「そのような平坦な愛撫では女は満足せんぞ。そうだ、もう少し前の方を探れ。そうだ、勘はなかなかいな。女はそこを悦ぶぞ」

女陰の裂け目の先端にある淫肉の重なる部分に舌を這わせて、懸命に愛撫をすると裂け目からどつと淫液が溢れ、炭治郎の顔を濡らしてくる。

生温かくてクラクラする女の匂いに溺れながら、炭治郎は必死に舌を動かすが、雛先を愛撫されるとそちらの快感が立って口の動きが疎かになってしまう。

「んっんっ！ふううっ・・・はあ、あぐっ・・・んっ、んっんっ・・・」

「ふふ、好いぞ炭治郎。そのまましっかり愛撫しろ。そうすれば、こちらもしっかり可愛がってやる」女無惨はそう言って嗤い、炭治郎の雛先を両手で上下に扱き、先端を口に包み込んで断続的にちゅ、ちゅ、と吸い上げて刺激を与えてくる。

（うう、快楽を感じると舌が・・・口がうまく動かない・・・）

ふうふうと息を吐きながら、炭治郎は必死に愛撫を施す。しかし、無惨の方が愛撫の舌が巧みで、炭治郎は我慢する隙もなく射精絶頂に導かれてしまう。

「んんん——！！」

腰をビクビクと何度も痙攣させながら、無惨の口の中に精液を吐き出し、ようやく心地よい絶頂を迎えて、炭治郎は久々に充足した達成感を迎えた。

「炭治郎、勝手に射精するな。ちゃんと私をイカせろ。それまで終わらせんぞ」  
そう言うと、無惨はさらに炭治郎の顔に女陰を押し付け、息苦しくさせる。

(くそっ・・・こ、こんな屈辱なこと・・・！)

しかし炭治郎に逃れる術はなく、女無惨の身体を満足させるまで息苦しさから解放されることはない。

懸命に舌を使って全体を愛撫し、零れる淫液を必死に飲み込むが、媚薬の効果があるらしく、炭治郎の欲情はどんどん上がり、身体が勝手に興奮してしまう。

責められる雛先はさらに感じやすくなり、炭治郎は何度も射精絶頂を強いられ、頭が白くなる快感に体中を痺れさせる。

「んっ、ぐっ、んぐううっ・・・ぶは、はぶっ・・・んん、んっ、んんん・・・」

舌と唇を必死に使って女陰を愛撫し、炭治郎はなんとか息を継ぎながら激しい愛撫にかかった。

「ふふ、いいぞ炭治郎、そのままと激しくしろ」

女無惨は笑うと、炭治郎の雛先を口で根元まで包み込み、上下に激しく抜き始め、舌を絡めてさらに悦を加える。

(そ、それやめろっ・・・！こつちに集中できなくなる・・・)

下半身の愉悦に流されそうになりながらも、炭治郎は無我夢中で舌と口を動かし、懸命に愛撫を続ける。舌先で女陰の裂け目を貫いた瞬間、そこが収縮し、奥からどつと淫液が吐き出され、炭治郎の顔面は濡れに濡れた。

「ほお・・・初めてにしてはなかなか達者だったな・・・やはり雌だから女の好いところがわかるのか・・・？」  
無惨にしては珍しく満足そうに言い、炭治郎の雛先を根元から吸い上げて、有無を言わずせず快楽を突き付けて射精絶頂させた。

「んんっ！あ、ああああっ・・・！」

女無惨が動き、ようやく顔面騎乗から解放され、炭治郎はまともにも息をすることを許される。その顔は淫液でひたひたに濡れ、奉仕していたのに逆に乱された被虐感があり、無惨の食指を愉しませる。

「さあ炭治郎、男にしてやろう」

そう言うとき身体を動かし、向かい合わせで炭治郎の身体の上のしかかって、自らの淫液に濡れた炭治郎の顔を舐め回してやる。

熱くてぬるつく微肉が雛先に擦りつけられ、快感でまた淫熱が煽られてしまう。

「んっ、は、ああ、や、やめろ、ああっ・・・あ、はああ・・・っ」

ぐちぐちと淫らかな音を立てながらしばらく素股をされて、炭治郎の雛先は完全に反応してしまった。舌や手、淫具とは違う新たな感覚に身体が悦んで、炭治郎の意思とは無関係に身体は反応してしまう。

「良い頃合いだ。飲み込んでやろう・・・」

無惨は可笑しそうに言いながら、身体を浮き上がらせて、女陰に炭治郎の雛先を飲み込んだ。

「あっ・・・あ、ああ、ああああっ！くあっ・・・！」

下半身に伝わってくる腰が蕩けそうな快感に、炭治郎はシーツを硬く握り締めて体中を痙攣させて感じ入る。

※中略※

どうだ？私の乳は美味いか？美味いだろう？お前は本当に果報者だ。ふふ、まるで幼児退化したようだな。お前は本当に可愛らしい」

炭治郎から乳房を離せると、また無惨は激しく腰を使い始めた。肉壺の中はぬめる感覚とザラザラした感覚が同時に与えられ、犯される胎内には奥へどんどん陰根が進み、結腸へ到達しようとする動き始める。その間も無慈悲に挿挿が続けられ、炭治郎は下半身の前後の快感で身悶えなければならなかった。

「んぐううっ！あつ、あつ、あああ、あ、はあ、んあああああつ！」

（も、もうこれ以上イキたくないのに……いつになつたら終わるんだ……）

絶頂を迎える度に脳の神経が擦り切れるような快感を覚えながら、炭治郎は激しく喘ぎ、善がり続ける。すでに我慢や抵抗というレベルではなく、ただ感じるがままに愉悦を味わわれるしかできない。

足首を拘束していた綱が左右に引つ張られ、180度近い大開脚をさせられてしまう。体位が変わったことで感じる快感はさらに強くなり、炭治郎は激悦の大波をともに受けてしまう。

「ふあつ！あ、んああ……！あつ！あああつ！あああ！も、もうっ……！ああつあああ！この体勢、だめえええっ！」

足裏を宙に浮かされ、踏ん張りがきかなくなり、快感を逃す場所を取り上げられてしまう。

ますます性感帯だけで快樂の揺れに抗って、踏みとどまるしかできなくなり、快感が一段も二段も上がってしまふ。

炭治郎の雛先を責めている肉壺がさらに締まると、ブラシのように感じる部分が鈴口にあてがわれ、全方向から激しく擦り、抉り上げられてしまう。あまりの激感に、炭治郎はなす術もなく射精絶頂を迎え、それが終わっても延々とゾリゾリとした強い扱きは続く。

「あつあつあつ、ひっ……！あつ！はああああつ！あ、ああああつ！やあああつ！」

「おや、男を責めているというのに、女のような声で鳴くじゃないか。随分そそる声だ、いいぞ炭治郎。快楽を受け入れる」

先ほど無惨からふんだんに陰気を流されて、射精絶頂は止まらない。しかも先程よりも快感は強く、炭治郎は絶頂の度に目の前が白くなり、意識喪失と覚醒の狭間で揺れ動かされる。

気が遠くなる愉悦が全身を駆け抜け、これ以上は無いと思われる快感をさらに簡単に超越され、炭治郎の意識は快楽一色に塗りこめられてゆく。

（こ、こんな感覚、耐えろ……耐えないと……頭、おかし、く、な……）

しかしズリズリと鈴口を激しく上下に摩擦され、また射精絶頂が訪れる。我慢など当に身体は忘れ、すでに無惨から与えられる激悦に溺れているが、意識は未だギリギリの所でとどまっていた。

雛先を飲み込んでいる肉壺は根元にザラザラとした責め、裏筋にぬるぬるとした責め、鈴口にザラザラとした責めが施され、一体どのような身体の形状になっているのか、時折その位置が入れ替わり、炭治郎を慣れさせない。

「んぐううっ……ふあ、ああ、あつ……ああ……！」



今度はぬるぬるの感覚が鈴口を包み込み、周囲から締め付けられながら上下に摩擦されて、先程の激しすぎる責めとは打って変わった、蕩かすような責めに、炭治郎の喉から甘い艶声上がる。

「炭治郎、気持ち良ければいい、と言え。そうすると、もっと気持ちよくなると、教えただろう？」  
無表情になった無惨が激しく腰を使いながら炭治郎に命令する。

(いやだ・・・認めない・・・！あつ、そこ、だめっ・・・！)

一方的に与えられる激悦に、身体中をビクビクと痙攣させながら、炭治郎は心だけは耐える。

「まだまだ調育が足りないようだな。こうすれば素直になるか？」

すると炭治郎の胎内を犯していた無惨の陰根が怪しい動きを始める。ずちゅずちゅと音を立てながら激しい挿挿をしていた陰根が、次に挿入された瞬間、さらに深い奥を抉った。

「あああああ———！！」

それはとうとう結腸に届き、炭治郎は引き攣った声を上げて身体を仰け反らせ、意識が飛ぶ激悦に肌を震わせる。

無惨の陰根は一度引いて結腸から離れるが、間断入れずまた奥を穿つ。

「あつあつあつあつあつ！あつあつあつ！あつあつあつあつあつあつあつ———！！」

口の端から生唾を垂らし、赫い目から涙を零しながらあらん限りの善がり声を上げる。甘く蕩けたその声に、無惨が微笑み、さらに肉壺の動きも変化させる。

中の形状が変わったのか、雛先全体に吸盤のようなものが取りついて、全方向から激しく吸い上げられてしまう。

「あっ・・・ふぁ、ひっ！ああああっ！あっ！あっ！あっ！ああああああああああああああ！」  
激烈な声を上げて炭治郎が全身を痙攣させ、無惨の身体が浮くほどに腰を激しく仰け反らせる。

前後挟み撃ちの快感に啼泣し、艶声を上げ続ける美童の姿は、恐ろしいほどに煽情的であり、同時に齒を立てたいほどに可愛らしかった。

「はっ・・・はぁ、はぁ、はぁ・・・ああああっ！」

無惨の腰の動きが止まり、肉壺も陰根も蠢くだけにとどまる。それでも十分達悦できるほどの刺激を持ったものだったが、炭治郎には甘い小休止と言ったところか。

「む・・・むぎ・・・無惨・・・も・・・やめろ・・・」

快樂で息も絶え絶えになりながら、炭治郎はふうふうと息を吐いて請願する。

「なんだ？気持ちいいのは嫌いか？おかしいな、この間はあれだけ好きだと喚いていたのに、コロコロと気分の変わるヤツだ・・・まあいい、それならば、また好きと言わせるだけだ。本当にお前は墮とし甲斐のあるヤツだよ。神慰の巫子」

そう言って嗤うと、無惨は再びゆつくりと腰の律動を開始した。

「ああああっ・・・！ああ、うっあああああ・・・っ！」

雛先がぬるぬると上下に摩擦されながら締め付けられ、胎内がゴリゴリと激しく抽挿される。胎の性感帯を適度に責めながら、時折結腸を突いて炭治郎の身体を跳ね上がらせる。

「あああああっ！」

「ふん、いちいち大袈裟だな」

しかし炭治郎が感じている激悦はとて我慢ができるものではなかった。常人が受ければ、すぐにでも跪いて許しを請うレベルの凄悦だ。それを人より感じやすい身体で容赦なく受ける激感、どれほどのものだろうか。炭治郎の精神力でなければ早々に堕ちていて当然と言えるだろう。

無惨の腰の動きに合わせて、炭治郎の性感帯があらゆる角度から責め上げられる。ぬるつく肉壺に締められながら摩擦され、涎が垂れるほどの法悦が押し寄せてくる。

胎内を陰根で抉られ、内壁を摩擦される度に逃れられない達悦へと昇りつめ、炭治郎は広げられた両足の指を内側に力強く縮める。

「んんっ……んんっ……ふあ、あ、あああっ……！」

「どうだ、気持ちいいだろう？」

炭治郎の頬に片手を当て、美貌の女性になった無惨が甘く囁いてくる。

「気持ちいい、と言え、炭治郎」

そしてその直後、激しくなる腰遣い。感じる快楽が一気に弾け、炭治郎は何も考えられなくなってしまった。

「んあああああっ！いい、気持ちいい、あっ！気持ち……いい……！」

(気持ちいい……)

それを認識した瞬間、炭治郎の身体が華開き、性的刺激を素直に受ける肌へと成り代わってしまった。

「うあっ！あっ！ああああああああっ！」

感じる快楽はさらに強さを増し、細胞の隅々にまで行き渡るほどに沁み入って炭治郎の身体を熱く燃やす。下半身以外の触れられていない身体の性感帯がはしたなく疼き始め、はあはあと緊張の息を吐きながら自らの両胸に手を伸ばす。

「いいぞ炭治郎。可愛いな。もっと気持ちよくなれるぞ。さあ、自分で触れ……」

「初めてじゃないだろう？私はもうすでに一度見ている。羞恥を感じる理由がどこにある？」  
拘束され、無惨が来るまでに淫欲に耐えられず、炭治郎は自らで桜色を弄って慰めていた。その記憶が羞恥を伴って蘇ったが、諦めのような感情も同時に湧き上がる。

「さあ触れ、炭治郎」  
無惨の細い女の手で両手を取られ、桜色に導かれてゆく。指先が先端に触れただけで、ビリビリと電流のように快感が走った。

「はあ、ああっ……あああ……」

甘い吐息をつきながら、炭治郎はゆっくりと自らの桜色をなぞり始める。快感が強すぎていきなり激しく触ることはできず、恐々とした手つきで丁寧に触れてゆく。それと同時に思い出される羞恥の出来事が、炭治郎の指を戸惑わせたが、もう耐えることはできなかった。

続きは本編でお楽しみください。

サークル「千切り野菜」は以下のように細々と活動しております。ご興味がありましたら遊びにきてやってください。

PIXIV 現在「淫鬼喰らい巫子」の連載を火曜0時更新で週間連載しております。

[ゲリババ大臣の小説・pixiv](#)

PIXIVFANBOX FANBOXでは掲載できなかつたハードなどを掲載しています。入会費は月額100円です。月始めに鬼徹、月終わりに鬼滅などをUPしています。

[ゲリババ大臣 | pixivFANBOX](#)

ブログ 小説の裏話や、日々のしょうもないことを書いています。残念ながら、あんまりおもしろくありません。

[ゲリババ大臣千切り野菜プロフィール・Cien \(ツェン\) \(d1site.com\)](#)